



針尾城跡を訪ねて

特派員の九じろう



編集長のキューちゃん

針尾地区にある針尾（小鯛）城跡は、ことし4月20日から7月8日まで市教育委員会によって発掘調査され、発掘現場からは、12〜16世紀の中国や朝鮮半島、東南アジア産の陶磁器類など約五千点の遺物が出土しました。今回は、針尾城の城主・針尾伊賀守の時代を中心とする当時の針尾城や海外貿易などについて、編集長のキューちゃんと特派員の九じろうがご紹介します。

針尾城跡へ向かう

7月6日、キューちゃんと九じろうは、針尾城跡を目指し、針尾島を縦断する国道202号を西海橋方向へと南下しました。針尾地区公民館前を過ぎたところで、国道を右折し、ミカン畑の間を針尾無線塔へと進みました。無線塔に近づくとぐるりと丘を回り込み、小道を下りて行く小さな港に着きました。ここが小鯛浦です。



△針尾城跡の下から小鯛浦を望む
◁空堀の中（深さ約2m）



針尾城跡遠望（林の中にある）



目の前の海は周囲が山に囲まれていて、潮の香りがなければ湖と見間違えそうなほど静かです。対岸は西彼杵半島で、その間は針尾瀬戸、瀬戸を右手に回れば佐世保湾、左手に行けば西海橋です。海岸沿いに立つ造船所や民家の前を通って針尾城跡へと向かいました。家と畑の間の小道を上ると、民家の背後の竹林と照葉樹に囲まれた林の中に針尾城跡がありました。城跡に入ると、土塁（注1）の上と空堀（注2）の中に、白い土囊と木の枝を並べて階段が作られ、中心部の発掘現場までは調査のための道ができていました。周囲の木立がかなり伐採されて広々となった現場では、調査員と十数人の発掘作業員がシャベルなどで発掘作業に従事していました。

針尾城ってどんな城？

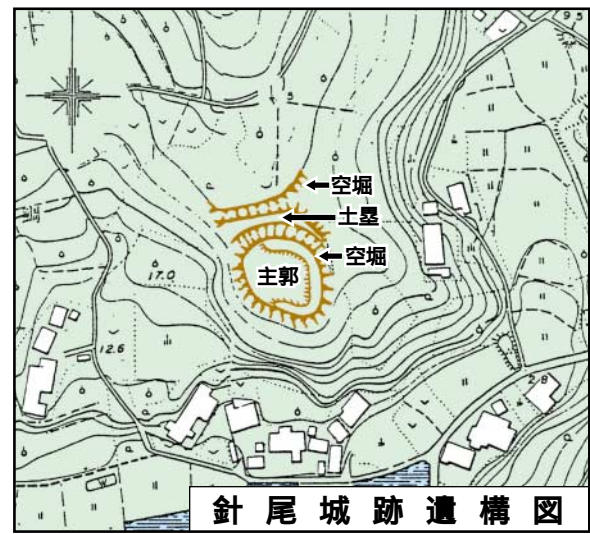
針尾城の重要性

九じろう 針尾城跡を発掘する目的は何なの？



キューちゃん 針尾城は、ポルトガル人宣教師のルイス・フロイス（注3）が書いた「日本史」（注4）に登場するんだ。まず、世界史

の舞台に登場するこの城の歴史を明らかにするのがその目的なんだ。「日本史」には、針尾城は針尾伊賀守の城として、「大村の海が極めて潮の流れ激しく狂奔する海峡のそばに城を構えていた」とあるんだ。書かれた時期は、ポルトガル貿易港として栄えていた横瀬浦（現西海町）が襲撃される（4ページ参照）永禄6（1563）年のこのことだよ。次に、城跡からは、12〜16世紀の中国や朝鮮半島、タイ産などの輸入陶磁器、また備前などの国内産の陶



針尾城跡遺構図



主郭（本丸）跡の発掘風景

器が出土し、広く国内外と交易していたことが分かったんだ。このほかにも、硯や茶臼などの石器、刀子や船釘などの鉄製品、さらには鉄砲の弾を作る坩堝なども出てきているよ。これらの出土物や当時の記録などからこの城が少なくとも14世紀には既に存在していて、市内では最も古い重要な山城（注5）だということも分かったんだ。

九じろう 針尾城跡の広さなどは？
キューちゃん 城の範囲は、東西約80m、南北60mで、一重の空堀と土塁に囲まれた中心部の広場が主郭（本丸）跡になっているよ。
九じろう 城跡の中心部の発掘現場には、たくさん穴が開けられているけどあれは何なの？
キューちゃん 調査員の話では、建物の柱の穴で、時代の異なるものが重なって建物の構造は分かりにくいそうだよ。

調査の結果、針尾氏は一地方の小豪族だったにもかかわらず、海外交易によって、当時の最新兵器である鉄砲を持ち、茶の湯をたしなみ、高価な輸入品を日常生活で使っていたことが分かった。そして、城は針尾瀬戸を通る船を見張ることができる位置に築かれたことも分かったんだ。



一口メモ

（注1）土塁 城を守るために、土を盛って墨壁を造ったもので、土居とも言つ。粘土質の土を混ぜてつき固める

（注2）空堀 城の墨壁の外側に造られる壕。濠には水濠と空堀がある。空堀は山城に多く、敵の侵入を防ぐために溝を掘ったもの

（注3）ルイス・フロイス 1532年リスボン生まれのカトリック・イエズス会士。東インドのゴアに派遣された後、永禄6（1563）年来日。佐世保湾の入口に位置する横瀬浦（現西海町）に上陸した。1597年長崎で没する

（注4）日本史 ルイス・フロイスが、16世紀末の日本の様子をイエズス会に報告するため記録したもの

（注5）山城 鎌倉時代から戦国時代までに造られた山城は、高い石垣の上に天守閣がそびえる近世城郭とは異なり、また岩的なもの。空堀や土塁のほか、斜面を登りにくくするために数本の溝を掘った空堀、山の尾根を真横に掘った堀切などからなっている

日本史辞典（角川書店）、歴史散歩事典（山川出版社）参照